巻頭特集

桑名市街の基礎を築いた名君

本多忠勝

桑名市民憩いの場「九華公園（きゅうかこうえん）」。
その入り口近くで
名槍「蜻蛉切（とんぼきり）」を背に、
鹿角の兜をかぶり、
どっしりと構えている像がある。
桑名藩初代藩主、
本多忠勝である。

立坂神社所蔵の本多忠勝像（市指定文化財）。黒糸縅の鎧、鹿角の冑、白毛の采配を持ち、床几に腰かけている。出陣姿を描いたとされる

戦場で武勇を馳せた徳川四天王の猛将

本多平八郎忠勝は天文十七（一五四八）年、三河国額田郡（現在の愛知県岡崎市）に生まれた。代々松平家（徳川家）に仕えてきた家柄で、忠勝も幼少の頃から家康に従っていた。

永禄三（一五六〇）年、十三歳で元服し、大高の役で初陣を飾る。以後、参加した合戦は五十数回に及ぶが、いずれの戦いにおいても傷一つ負わず、敗れたこともないという。十五歳で敵の首を取ったとも伝わり、勇猛果敢ぶりが知られていた。

武田信玄との一言坂の戦いでは、窮地に陥った家康を退却させるため、殿（しんがり）を務めて奮戦した。無事に家康を逃がした武勇が武田方にも称賛され「家康に過ぎたるものが二つあり　唐の頭に本多平八」の狂歌が詠まれた。

慶長六（一六〇一）年一月、桑名藩十万石を拝領し、初代藩主となる。同十四（一六〇九）年に家督を嫡男の忠政に譲った。翌年十月十八日、六十三歳で没す。常に家康の側近として仕え、戦場での剛勇をもって家康の天下取りに貢献してきたため、忠勝は徳川四天王の一人に数えられた。

大規模な都市改造で桑名の城下を整備

忠勝は関ヶ原の戦いの功によって、上総国大多喜十万石から伊勢国十万石へと転封される。加増もなく、江戸から遠く離れた桑名への移封は、もはや戦国の世ではないという家康の判断で、武功派の忠勝は疎んじられたのでは、という見方もあるが、桑名市博物館歴史専門官の大塚由良美さんは異なる見解を示す。

「関ヶ原の戦いで勝利を得たものの、大坂の豊臣秀頼をはじめ、豊臣系の西国大名は未だ顕在です。家康は交通の要衝である桑名に、信頼のおける忠勝を配して、西国の勢力に対する防衛役にしたと考えられます。加増についても、忠勝が固辞したため、次男の忠朝が五万石で大多喜城二代目城主に取り立てられています」

上）桑名城が廃城になる際、本統寺（桑名別院）に移されたと伝わる櫓。「聚星閣」と称していたが、第二次世界大戦の戦災で焼失した（個人蔵）　右）通称、正保城絵図と呼ばれる勢州桑名城中之絵図。桑名市は戦後、以前の町並みに戻すよう努めたこともあって、現在の市街地と重なる部分が見て取れる　左）桑名城の発掘調査時に撮影された二之丸堀北の石垣。桑名城では多くの石垣が築かれたが、石の産地は不明である

浄土寺本堂の横手にある本多忠勝の墓

桑名に入った忠勝が最初に取り組んだのが町割で、六月十八日から工事が始まった。川の流れを変えて堀割とする普請から着手し、九月には多くの町衆を移転させる大規模な工事へと発展する。町中の家や蔵を取り壊していく工事の間、人々は川に浮かべた筏（いかだ）の上に小屋を建てて暮らしていたという。

勇猛で知られた武将らしい強引な手立てと思われそうだが、忠勝は水運で栄えていた桑名の実情をよく把握していた。町割には湊の拡大なども含め、城下町というだけでなく、湊町、商人町、宿場町としても発展するよう先を見据えたものと、町衆も理解していたようだ。それを裏付けるように、堀の一部は町衆自ら買ってでて掘った実例が桑名の商人、太田吉清の『慶長自記』に記されている。

武家と町家の居住地を区別し、さらに同業者を集めた油町、鍛冶町、紺屋町、魚町などの町が生まれた。寺は城下町入口付近二カ所にまとめ、防備の役割も持たせた。約四年にわたったこの大事業は「慶長の町割」と呼ばれ、現在の桑名市の原型となった。

桑名のまちづくりに力を尽くした晩年

町割普請と並行して、桑名城の築城も進めた。本丸の四方には四層の天守のほか、三層の隅櫓（すみやぐら）三基を備えるなど、十万石の城としては重厚な構えとした。これは家康や秀忠が上洛の折に逗留（とうりゅう）するため、防備を万全にしたことが要因にある。また、多度大社の再建に尽力するなど、寺社の復興にも力を注いだ。

さすがの猛将も齢を重ね、六十歳を目前にして病がちとなり、「蜻蛉切」を三尺ほど短くした。その頃の忠勝についてこんな話が残っている。揖斐川の葭原で、嫡男の忠政と若い家中の者たちが葭をなぎ払う力比べをしていた。忠政が棹をふるうと、四間ほどの葭が折れた。それを目にした忠勝は棹を取り、槍のようにしごき、気合い一閃すると葭は八間ほど切断された。老いてなお、若者に優る力を持っていたとされる。

三河古参の譜代として、忠義一徹に生きた忠勝。桑名転封後から生涯を閉じるまでの約十年は、晩年を過ごした桑名のまちづくりに費やした。葬儀は盛大に執り行われ、浄土寺に埋葬された。忠勝の生き様は、今もなお桑名に息づいている。

「蟠龍櫓」は七里の渡付近に建つ櫓。外観復元され、1階は水門管理所で、2階は展望台兼資料室として公開されている（入場無料）

Information

桑名市博物館
住所／桑名市京町37-1
問い合わせ／0594-21-3171

桑名市博物館歴史専門官
大塚由良美さん

本多忠勝の銅像。蜻蛉切の大きさは実物と同等の約6メートルある

文／長屋整徳　写真提供／桑名市博物館　デザイン／ABBEY ROAD